



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | Madhya Deśa Kī Bolī : Banārasīdāsaの場合                                               |
| Author(s)    | 古賀, 勝郎                                                                              |
| Citation     | 大阪外国語大学学報. 1971, 23, p. 61-81                                                       |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/80384">https://hdl.handle.net/11094/80384</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

KOGA Katurō

# Madhya Deśa kī Bolī

—— Banārasīdāsa の場合 ——

古 賀 勝 郎

बनारसीदास : "मध्यदेश की बोली"

वैसे बनारसीदास जैन कृत "अर्ध कथा ( अर्ध कथानक )" का हिन्दी साहित्य के इतिहास में विधा विशेष की दृष्टि से विवेचन अपेक्षित है, पर उसका महत्त्व भाषा विज्ञान की दृष्टि से भी कम नहीं है। अतः प्रस्तुत लेख का लक्ष्य उस 'कथा' की भाषा के मुख्यतः रूपात्मक अध्ययन द्वारा हिन्दी भाषा( ब्रज भाषा तथा खड़ी बोली दोनों ) के इतिहास पर प्रकाश डालने में है।

## は じ め に

小稿は Banārasīdāsa (1643—1700 Vikrama S., 以下 BD と略) の “Ardha Kathānaka” ないしは “Ardha Kathā” (以下 AK と略) に使用された言語について論ずるものである。

AK は自伝という点で、ヒンディー文学の中で特異な地位を占めるものであるが、それと同時にヒンディー語史の研究上でも興味深い資料を提供する。BD の言葉の特異な様相を考える上で、自伝という性格による制約はあるが、BD の生涯がかなり詳しく判明しているという利点もある。

BD は AK に使用した言葉を Madhya Deśa kī Bolī ([インド] 中央もしくは中部地方の言葉の意, 以下 MB と略), ないしは Bhākhā と呼んでいる。それは当時の Madhya Deśa のインド人にとってのペルシア語及びサンスクリット以外の標準的な文語であった Bhākhā と同一ではなく、それに似通ってはいるが、後述するように kharī Bolī の影響をかなり受けたものである。

ここで BD の生涯についてふれるならば、Vikrama 紀元の1643年 (1586年A. D.) に今日の Uttar pradeś 東部の Jaunpur で生まれた BD は、Vi. S. 1667年に至るまでの20余年間に同地を離れていたのはわずかに1年数ヶ月の期間でしかない。Jaunpur 地方は現在 Bhojpuri 語地域<sup>\*1</sup>に含まれているが、AK の言葉には Bhojpuri ないしは Avadhī のなんらかの影響が見られても不思議ではないのであるが、それは全くといってよいほど見られない。<sup>\*2</sup> Vi. S. 1667年に宝石商の息子として一人立ちするためムガル朝の都アグラ (Āgrā) へ出た BD は、商人としては失敗を重ねるばかりであった。それはともかく、彼は Vi. S. 1698年に AK を書くまでの間にわずか3年を Banāras, Paṭnā, Jaunpur などの諸都市で過ごしたのみで、約30年間、アグラで暮らしていた。アグラは言語分布上からは Mathurā と並んで Braj Bhāṣā 地域の中心部に所在する。しかるに、BD は Sūradāsa の “Sūra sāgara” に見られるような Braj Bhāṣā

\*1 部分的には Avadhī 語地域に含まれている。

\*2 わずかに名詞・代名詞の複数斜格形の語尾が -nha である点を指摘できるかも知れない。しかし、それは Nāthūrām Premī の読みであって、Mātāprasād Gupta はそれをすべて -na と読んでいる。

(Bhākḥā) を用いていない。

このことは彼の先祖が Kharī Boli 語地域の出身であったとの記述に関連づけて考えてもよいことではあろうし、そうした理由も否定はできないだろう。しかしながら BD が、すでに Tulasidāsa によって立派な文語として用いられた Avadhī の話される地域に接して育ちながらもそれを使用せず、また、すでに標準的な文語としての地位を確保していた Braj Bhāṣā (Bhākḥā) も用いなかったことについては、やはり彼の教養や生活環境ばかりでなく、アーグラーをはじめとする当時の大都市における言語事情といったさらに大きな背景をも考慮に入れねばなるまい。

AK を検討してみると、いわゆる Tatsama 語彙の使用が非常に少なく、Tadbhava ないしは Ardha Tatsama の状態にある口語の語彙が躊躇なく使用されているのに気付く。この点はアラビア語・ペルシア語由来の語彙についても同じことで、さらに徹底しているとも言う。このような傾向は当時の詩人たちの一部にも見受けられるところではあるが、やはり AK の言葉の特徴の一つとして指摘できよう。だが BD は、それと共に学術的な表現を一切避け、あるいは、Dohrā を使用するなどして、簡潔にしてしかも表現力豊かな言葉を用いるのに成功している。ところで、それを可能にした要因を求めてみると、まず、口語表現への接近ということが注意をひく。そしてさらにそれは MB そのものの言語的特徴と密接な関係があるように思われる。

周知の如く、インドにおけるイスラム勢力の確立・伸展がデカン地方における Dakkhinī の成立及び文語化を可能にしたのであるが、Dakkhinī の成立と発達に作用したものと同じ力は、今日のヒンディー語地域を中心とする北中部インドにも同時に及んでいたものと考えて差支えなからう。すなわち、パンジャブ地方・デリー近辺・U.P 西北部の言語がいわゆるヒンディー語地域ばかりでなく、イスラム勢力と共にデカン地方にまで都市部を中心にひろまっていった。それは土着の言語を死滅させるような形ではなく、共通語的な形によったものである。もとよりそこには地方語との接触などにより多少の差異が生じたことは認めねばなるまい。ところで、そうしてひろまった上述の地域の言語の中でも、西部ヒンディー語に属する Kharī Boli と Braj Bhāṣā (Bhākḥā) とは当時の政治的・軍事的・文化的な中心地の言語として主要なものとなり、持続的な影響力を有していた。そしてこの両者は相互に作用し合ったが、共通語としての影響力は前者のほうが次第に後者のそれをしのぐようになっていった。

16世紀初頭よりアーグラーの政治上・軍事上の重要性が増すにつれ、デリーとの関係もいっそう深まり\*1、軍人・商人・職人などの移住・往来がさかんになった。そして言語面では、KB の影響が都市居住者を中心に増大することになった。このような背景を理解した上で、AK も上述の言語事情を物語る資料の一つとして把握すべきであろう。ただし、こうした事情があったにもかかわらず、当時の Madhya Deśa における非ムスリム・インド人のサンスクリット以外の文語としては、Braj Bhāṣā (Bhākḥā) が主として用いられる伝統があった。このため AK に見られ

---

\*1 The Tuzuk -i. Jahangiri, translated by A. Rogers, 2nd ed., 1968, Delhi, p.4.

る特徴を示す言葉が文語として用いられた例は少ない。それはともかく、BD は、おそらく AK で用いたものとさほど差のない言葉をアングラーばかりでなく、4 年間ほどの Allahābad, Paṭnā, Banāras などでの日常生活や商活動に使用していたものと考えてよからう。このような意味で AK は Braj Bhāṣā (Bhākhā) 及び Kharī Bolī の両方にまたがる歴史ばかりでなく、当時の Madhya Deśa の言語事情を検討する上でも重要な資料であるといえよう。

小稿ではこうした観点から MB の特徴を明らかにするため主として形態論の面から考察する。ただ、先述したように、これにはたとえば動詞の形態についての用例が少ないという、自伝に由る資料面での不満も感じられないではない。なお、末尾に AK に現われたペルシア語（アラビア語）由来の語彙を網羅したものを付し、MB 理解のための資料となした。

なお、本稿のテキストとしては Nāthūrām Premī 校訂 “Ardha-Kathānaka” (Bombay, 1957, 2nd ed.) 及び Mātāprasād Gupta 校訂 “Ardha Kathā” (prayag, 1943, 1st ed.) を使用した。前者は次の 5 写本を校訂に際して使用している。A. ボンベイの Bholeśvar の Pancāyati Mandir 本（ヴィクトリア紀元1849年）、B. デリーの Jaina Mandir Dharamapurā 本（Vi. 1902 年）、C. デリーの Baidabārā 本（筆写年不明）、D. カルカッタの Asiatic Society 本（No.7, 176）E. バナーラスの Syādavāda Vidyālaya 本（Vi 1948年）。M. P. Gupta は上の B 本のみを使用しており、N. Premī 校訂本に比して、13 句（Nos. 392, 559—566, 622, 623, 665, 671）少ない。

#### 略 号 一 覧

##### (1)

AK. Ardha Kathānaka, Ardha Kathā

APa. Apabhramśa

Ar. Arabic

AV. Avadhī

BB. Mirza Khan's Grammar of the Braj Bhakha by M. Ziauddin, Calcutta, 1935

BD. Banārasīdāsa

BH. Bhākhā (Purācin Braj)

DVB. Dharendra Varmā, Braj Bhāṣā, Prayāg, 1954

KB. Kharī Bolī

MB. Madhya Deśa kī Bolī (Banārarīdāsa)

MP. Mātāprasād Gupta

NP. Nāthūrām Premī

PA. Purānī Avadhī

Per. Persian

SB. Premnārāyaṇ Ṭaṇḍan, Sūr kī Bhāṣā, Lakhnau, 1957

(2)

abl. (ablative), ac. (accusative), adj. (adjective), adv. (adverb), ag. (agentive),  
dat. (dative), dir. (direct case), f. (feminine), gen. (genitive), inst. (instrumental),  
interj. (interjection), loc. (locative), m. (masculine), n. (noun), nom. (nominative),  
obl. (oblique case), pl. (plural), pr. (pronoun), sg. (singular), voc. (vocative)

## I

1. 名詞は性・数・格に応じて変化する。
2. 名詞は男性名詞と女性名詞とにわけられる。代名詞には形態の上で性による区別はない。
3. 文法上の数には単数と複数とがあるが、後述するように複数形は単数形と異なるものが存在する場合にもほとんど用いられていない。
4. 敬語法により単数名詞が述部に複数形をとることがある。Sundaradāsa kalatra juta mari gae (7), ((madanasingha)) ghara ae phira baiṭhe hāṭa (81)
5. 次の例では BD が自分自身に言及している部分であるが、韻律上の制約がないのに述部に複数形をとっている。taba banārasī hvai halabale, barasata mehu bahuri uṭhi cale (304), māsa eka bahara na gae (326)
6. BH では、集合体を表わす語を単数形に加えて複数の意を強調する方法がかなり用いられたが、AK では Jana 及び Loka もしくは Loga によるものが用いられているのみである。kavijana (24), byaupāri loga (298)
7. 格変化としては後置詞を伴わない直格形 (dir.) と後置詞を伴う斜格形 (obl.) とがある。直格形は、① 動詞の主語である場合 (ag. の後置詞が用いられない場合も含めて)、② ac. にある場合、③ 数詞に修飾されている場合、④ voc. にある場合に用いられている。① suta avat-aryau (245),\*<sup>1</sup> ② bhojana kari āvahu\*<sup>1</sup>(349), bātai karahi (336), ③ barasa dvai tīni māi (70), ④ mita (89), kanta (381)

---

\*1 DVB によれば (p.45), デーヴェナーガリー文字の唇歯音字は BH においては実際には両唇音のように発音されていたようである。しかし、ここでは両唇音 b や半母音 w の発音と考えられるものもそれには音写せず、すべて va のままにして写した。

8. 7 以外には斜格形が用いられるが、それについては後置詞の項において詳述する。ただし、後置詞はひんぱんに省略される。

9. sg. dir. は無変化である。m. suta (70), beṭa (449), kaparā (570); f. sutā (70), roṭi (447), cīṭhī (476)

10. sg. obl. においては、-ā, -o, 及び -au 語尾の男性名詞が、いずれも -e (-ai) に変わる以外、すべて無変化 (9 と同じ) である。yaha bāta pujāre kahī (92), janeū gale (425); bipra nai/ nai/ māryau/māryo/(507), cīṭhī mahī (495)

11. -ā 語尾男性名詞が loc. の場合、語尾が -e ないし -ai に変化するのみで、後置詞は省略されることが多い。kādhai (416), āgarai (519)

12. m. pl. dir. においては、-ā, -o 及び -au 語尾男性名詞が -e に変わる以外はすべて sg. dir. と同じである。doi rojanāme (490), cūhe marahī (573): gāvahī kāmīni māṅgalagīta (85)

13. f. pl. dir. においては bāta のような -a 語尾名詞が bātai という形を示すことがある。しかし、多くの場合、数詞などによる複数表示のみで、形の上では sg. dir. と同じである。mīṭhi bātē/bātai/karai (508): kharagasena kī cīṭhī ghanī (326), sutā doi (642)

14. pl. obl. は性の区別なく、語尾に -na (もしくは -nha)\*1を加えてつくられる。coranha/corana/lūṭi liyau (78), rūkhana tale (427), nau bātanha/bātana/mai/mē/(461) この第1例のように Ag. に相当する後置詞を伴わずに用いられている例は他にも見られる。

## II

1. 1 人称代名詞の sg. dir. には mai のみが用いられており、DVB 及び SB の数える hau は全く使用されていない。sg. obl. には mujha-, mo-, mohi が、pl. dir. には hama が、pl. obl. には hama-, hamahi が用いられている。

2. sg. 及び pl. とともに ag. の nai などと伴った形では現われておらず、直格形が用いられている。

3. ただし、その場合、動詞は目的語の性・数に一致している。mai to kalapita bacana aneka kahe (266)

4. mo- は後置詞を伴って用いられる。mo-kaū/mo-ko/(529), mo-pai(90)。mohi は dat. に相当する形として mo-kaū と同様に用いられている。

5. mo- と並んで、KB. の形とされる mujh- も用いられている。mujhe/mujhai/ khāṭa binu parai na caina (305) mujha-kaū という形は見られない。なお、mujh- は (191) においては gen. の意にも用いられている。

---

\*1 NP は -nha と読み、MP は -na と読んでいる。

6. sg. gen. は次の通りであるが, mora- などの形は全く見られない。merau marana (160), mere bhauna (405), meri caupari (419)。1ヶ所に merau (mero) の意に Skt. の mama が使われている (506)。

7. hama は mai の意にも用いられている。aba hama bahuri/bahura/ āgarai jāhi/jāhi/ (519)。しかし, hama loga という複数強調形は現われていない。

8. hamahī は dat. に単独で用いられている。hama- は kaū などの後置詞を伴って現われる。hamē ないしは hamai は見られない。

9. pl. gen. には次の用例がある。hamārau bhavana (302), kahā hamārā (331), rahau hamāre geha (404), hamārī bāta (300)。hamāra に注意。

10. 2人称代名詞は次の通り。dir. sg. tū, obl. sg. tujha-, tō, tohī; dir. pl. tuma, obl. pl. tumāa, tumahī。

11. sg. に tū や taī は全く用いられていない。to- と tujha- とは後置詞を伴って現われる。tujha-kaū (480), tujha binu (495)。tohī は dat. に用いられている。(90)

12. sg. gen. の用例には terā (506) 及び tere ghara saū (405) がある。

13. tuma は実際には2人称単数について用いられたものが多い。

14. dat. には tuma-kaū と並んで tumahī も用いられている。

15. tū 及び tuma はいずれもそのまま ag. に用いられる。

16. gen. には tumhārau (381), tumhāre (376) の用例があり, tumhārā (88) という形も見られる。tihārā など ti- 形は見られない。次の例からは tumha は gen. になる。mai tumha-/tuma/ dāsa (419)

17. KB の2人称尊敬代名詞 ‘āp’ に相当する āpa, rāvare などの使用例はない。

18. vaha は指示代名詞及び3人称代名詞として用いられ, また代名形容詞としても用いられている。これは次のような変化を示している。dir. sg. vaha, obl. sg. vā-, usa-, usahi, dir. pl. ve, obl. pl. una (uni)。

19. dir. の sg. と pl. との区別は明らかである。しかし, (380) の vai/ve/ は実際には単数のもの(娘婿)をさしている。これは敬語法によるものと思われる。

20. usa- は代名詞として後置詞を従える場合のほか, 指示形容詞の斜格形としても使用されている。usa māhi (320), usakī dasā (483), usa/visa/hī roja (543)。usahi の用例としては, ac. に用いられた gunahagāra kijai usahi (542) がある。vā- は vā-kī hāta (338) のように gen. に用いられたり, 形容詞的に用いられたりしている (207)。vāhi は現われていない。

21. una- (uni-) が後置詞を伴わず単独で用いられた場合, 実際には sg. ag. に用いられていることがある。\*<sub>1</sub> uni/una/dayāla hoi pakarī bāha (304)。(380) の例は敬語表現によるものと考

\*<sub>1</sub> ag. に usa- や vā- に基いた形はない。次の代名詞 yaha, so, jo についても, isa-, yā; tisa, tā-; jisa-, jā に基いた形がなく, それぞれ ina, tina, jina が sg. ag. に用いられている。

えられる。unakaū/kau/

22. yaha は近接指示代名（形容）詞並びに 3 人称代名詞として使用されている。dir, sg. には yaha のほかに yahu, eha が用いられている。obl, sg. には yā-, isa-, iha, ihi, ehi が, dir. pl. には e, ye\*<sup>1</sup> が, obl. pl. には ina- (ini-), inha- が見られる。

23. iha, ihi, ehi\*<sup>2</sup> は ehi bidhi (63, など) に代名形容詞として多く用いられており、代名詞の斜格に用いられた例はない。isa は代名詞として後置詞を伴って用いられるほか、形容詞的にも用いられる。isa avasara (168) yā- の使用例は少ないが, isa- 同様に用いられている。yā-saū/sau/ (450), yā hī bharata sukheta māi (8), yā-tai (35)

24. ina (ini), inha は ob. pl. に — ina uṭhi kai dīnī āsisa (424) — 用いられているが, una- と同じく sg. ag. の意にも用いられている。inha/ina/paramesvara kī lau dhari (418)

25. so は相関代名詞として, MB においてはひんばんに用いられている。これの obl. sg. は tā-, tāhi, tisa-, dir. pl. は te, obl. pl. は tina- である。

26. tā- は, ab., dat., gen., loc. に用いられている。ta-tai (6), tā-saū (565), tā ke tale (479), tā māi (632). tāhi は dat. にのみ用いられている。saūpyau tāhi bastra kā kama (497). tisa- は dat. 及び gen. に用いられた例があるが, 他は形容詞的に用いられている。tisa kaū/ku/ (462), tisa geha (349), tisa ṭhaura (414)

27. Apa 形と同じ tāsu は sg. gen. の意に用いられている。tāsu purohita (102), tāsu damda (222)。ただし, sg. gen. としては上述の tā- 形の使用のほうが多い。sg. gen. には tisa kī kathā (6) の表現もあるので, 合計 3 種の方法があることになる。

28. so の複数形は te のみ用いられており, se は現われていない。(9, 253, 297) te は反復した形でも用いられている。je je bātai smirana bhai te te (658) は pl. ac. にも用いられている。(同様な ac. への使用は so についても言える。)

29. tina についてはすでに 21 の脚註において言及したが, ここで若干補足する。tina はもちろん obl. pl. に用いられている。tina/tinha/ke sātha (231) tinha kaū/tini kau/ (473) ところが, 次の例では, tina の意味は KB の ‘us ne’ 以外には考えられない。unāsie putrī avatari, tina āuṣā pūri karī (620)

30. koī, koū 及び koū が不定代名詞として用いられている。もっとも, 押韻のために koī は koi ないしは koya となっている (187)。これの斜格形は kāhū で後置詞を従えて kāhū saū (339), kāhū pai (659) のように用いられたり, そのままの形で ac., すなわち, KB の ‘kise’, ‘kisi ko’ の意に用いられったりする。kāhū māre korarā, kāhū beṛi pāi (469) また, gen. に用

---

\*1 NP は e, MP は ye としている (376, 443, 460, など)。

\*2 PA の ihi, ehi 参照。

いられた例もある。<sup>\*1</sup>

31. *koī* など是不定代名形容詞としても用いられる。*koū mānusa* (414), *kāhū samai* (55) なお, (211) には *kisa* が KB の ‘*kisī*’ の意に使用されている。

32. KB の ‘*kuch*’ に相当する不定代名詞としては, *kachū*, *kachu*, *kichu* が用いられている。  
<sup>\*2</sup> *kichu/kachu/kharacī* (53), *kichu/kachu/āyo* (90)。

33. KB の ‘*kaū*’ に相当する疑問代名 (形容) 詞としては, やはり *kaū* が使用されており, *ko* は現われていない。*paraī kāla-mukha kaū* (114), *aba kaū bicāra* (158)。obl. sg. *kaparā* には *kisa-* が用いられており, *kā-* や *kaū* は用いられていない。*kisa* が *ke* を介さずに後置詞に接続して用いられた例がある。*kaparā tela gñiu kisa pāsa* (312)

34. KB の ‘*kyā*’ の意味にも AK では ‘*kyā*’ が用いられており, BH や Braj の *kahā* は一度しか現われていない。(381) また, (138) に *kā* が見えるが, MP によればこれは *kyā* である。

35. *jo* は関係代名詞として用いられている。*jo* と並んで *ju* が dir. sg. に用いられている。obl.sg. には *jā-*, *jisa-*, *jāe*, *jāhi* が, dir. pl. には *je* が, obl. pl. には *jina-* が使用されている。下の例からも判明するように *so* と関連した用法が普通である。*jo dukha dekhai so sukha lahai* (128), *sutā kumārī jo hutī so paranāī seni* (71)

36. *jā* には gen. の用例がある。*jākau jasa* (12) 形容詞的用法の obl. sg. には *jisa* が用いられている。*jisa gāu* (162) *jā* は次の例では dat. に用いられている。*jāi/jāy/kīnī aradāsa* (159). *jāhi* (306) はやはり dat. に使用されている。

37. dir. pl. に *jo* や *ju* が用いられた例はなく, 常に *je* が使用されている。*je bhakhahi para-doṣa-guna* (668), *je je pana kī bastu saba* (233) dat. pl. に *jinhaī* (*jinhē*) の用例はない。先述の通り *jina* は sg. ag. の意味にも使用されている。*jina pahirī jina janamapura mudrikā chāpa* (3)

38. Apa 形の *jāsu* の用例は見られないが, *jisu* が KB の ‘*jiskā*’ の意に用いられた例が見られる。*nimdā thuti jaisī jisa hoi* (609)

39. 再帰代名詞としては *āpu* や *āpa* が用いられている。これは obl. においても gen. を除き変化しない。*āpa saū āpa* (3) gen. には *apanaū*, *apane*, *āpuna*, *āpanī* などが用いられている。*tina apanaū ghara khālī kiyau* (119), *apanau carita* (672), *āpuna ghara* (269), *āpanī kathā* (4), *āpanī cīṭhī* (326) また, 同じ意味には *nija* も *nija kathā* (3), *nija mātā saū* (52) のように使用されている。

40. 複合代名 (形容) 詞としては次のようなものが見られる。*saba koī* (560), *saba kichu/kachu* (43), *ju kachu* (72), *jo kachu* (373), *kachu aura* (611)

### III

<sup>\*1</sup> *kei* が用いられている例があるが, MP は *koū* と読んでいるので疑点は残る。

<sup>\*2</sup> NP は *kichu*, MP は *kachu* と読む。

1. ここでは後置詞の名で一括されるものを扱うが、厳密には区分すべきものがこの中に含まれていることを予め断っておく。

2. *ne, nai, nē* が *ag.* を表わす後置詞に用いられている。*bipra nai māryau bahuta sarāpha* (507) しかし、これはすでに述べたように MB においては用いられていない場合が多く見られる。*tārācanda kiyau chala eha* (349) これはやはり BD の特殊な用法として捉えるべきではなく、*Sūradāsa* の用法などと対比して考えるべきことである。<sup>\*1</sup>

3. これが省略された場合、名詞・代名詞は斜格形になるのが普通であるが—*jaba yahu bāta pujāre kahī* (92) —、直格形のまま用いられていることもある。*duhu jina siva māraga pragata kīnyau* (2) しかしながら、いずれの場合にせよ、動詞は目的語の性・数に一致している。代名詞についても同じことがいえる。*jyāu dekhī māi baranī tathā* (209), *so uni/una/bhejyā* (570)

4. KB の ‘*ko*’ に相当するものとしては *kaū, kau* が用いられており、BH の *kō, kũ, kū* などは現われていない。そして、これは *dat.* に用いられたものが圧倒的に多く、*ac.* に使用された例ははなはだ少ない。*ac.* の場合はほとんど直格形が用いられているというわけである。*pitā putra kaū āi mīca* (20), *saba kaū/kau/phārakhatī likhī dei* (51), *nūrama kaū livāi lai gayau* (165)

5. *kaū* などと同じ意味に用いられたが、格語尾ともいうべき *-hī* や *-hi, -ai* は MB においては代名詞に用いられているのみで、名詞については使用されていない。これは後置詞の発達を考える上で重要な参考になる。

6. *dat.* と *ac.* とが同一文中に用いられる際には *dat.* に *kaū* や *saū* などが使用されるのみで、*ac.* の名詞は常に直格形におかれる。*hama kaū dāma dehu* (360)

7. KB の ‘*se*’ は、① *instr.*、② *abl.* 及び③ *dat.* の意に用いられるが、AK においては、*saū* は ① *patha saū nikau bhayau* (207), ② *paṭane saū* (204), ③ *tuma saū bolai* (405) のように①②③のすべての意に使用されている。だが、これも次のように省略されていることがある。*tilaka diyo nija hātha* (287) AV 形の *sana/sū/* は③に、*setī* は②及び③に使用されている。*kīnau saba sana/sū/ neha* (541), *taba setī sivapurī jagata māi jānī hai* (2), *banārasī setī prīti* (454)

8. ②の意には *taī* も用いられているが、常に「それゆえに」(*tā tai*) の形で現われており、いわば副詞を成しているのが特徴である。これは①及び③の意には使用されていない。

9. KB の ‘*kā*’ に相当するものとしては、やはり *kā* が使用されている。<sup>\*2</sup> *coranha/corana/kā caudharī* (418), *ghara kā bhārā* (350) しかし、比率の上では *kau/kaū/* のほうが圧倒的に

<sup>\*1</sup> BD の *nai* などの使用は、“*Sūrasāgara*”における全く例外的な場合に限られた使用と比較すれば、はるかに多いことになる。SB p.156—7

<sup>\*2</sup> “*Sūrasāgara*”には *kā* は使用されていない。

多く用いられている。jākau jasa (12), mūlā kau/kaū/ kālā (22)。

10. ke 及び ki はそれぞれ KB のそれと同様に用いられている。majūra ke sisa (531), kālā ke mukha saū (548), madhya desa ki bolī (7), mantra kī mālā (10)。なお, kai や kaī も ke と同義に使用されているが, 多くはない。

11. なお, 複合名詞方式\*1 による gen. 表現がかなりひんばんに用いられている点が特徴として数えられる。これは単に韻文における簡略表現にのみよるものではなく, かなり一般的な用法であることは下の例によっても判明しよう。今日の KB ではこの種の複合語方式はほぼ Tatsama 語彙の場合に限り使用されている。kharagasena-ghara (77), karaja-kacauri (339), jagata-jana (610)

12. KB の ‘mē’ に相当するものとしては, maī が最も多く用いられているが, māhi, māhi, māha などとも使用されている。ghara maī (335), nagara māhi (31), chāyā māha (304)

なお, これらもひんばんに省略されている。cita upajī dayā (299)

13. viṣai が (60), (183) などにおいて, ‘mē’ ほどの意に用いられている。udara viṣai (60), nagara viṣai (183)

14. KB の ‘par’ に相当するものとしては, para, pari, pai などが用いられている。このうち pai は次のように KB の ‘pās’, ‘nikaṭ’ ‘samip’ ほどの意にも用いられている。so to ina pai nāhi (111), bhānacanda pai vidyā sikhai (176), so mo pai āyo parataccha (90)。次の例では ‘se’ に相当する用法が見られる。kāhū pai (659)

15. pāhi (pāhi, pāhi) は, “sūra-sāgara” や “Rāmacaritamānasa” にも見られるものであるが, 次のように KB の ‘pās’, ‘nikaṭ’ 及び ‘se’ などの意に用いられている。gae rāiji pāhi/pāhi/ (53), bheda na bhākhai kisa hi pāhi/pāhi/ (211)

16. KB の ‘tak’ (まで) の意味には laū が用いられており, ‘tak’ は見られない。paṭanā laū (35), kahā kahā laū (452) tāī も同義に用いられている。baratamāna tāī (5), taba tāī (622)

17. tale は KB におけると同様に名詞類の斜格形に直接に接続する場合と, ke を介して斜格形に接続する場合とがある。dharatī tale (253), khātake tale (307), tāke tale (479), inha/ina/rūkhana tale (427)

18. KB の ‘binā’ の意に binu もしくは binā が名詞類の斜格形と ke を介さずに接続している。khāṭa binu (305), binu nāha (247)。

19. KB の ‘ke lie’ の意にはやはり ke lie/liyai/ が使用されている。lobha ke /kai/lie/liyai/ (214)

20. pāsa は KB の ‘pās’ と同義に副詞並びに後置詞として機能する。後置詞としては ke を介することもあるが, 介さずに接続することもある。devadatta ke pāsa (168), kisa pāsa (312)

---

\*1 Mirza khan もこれを指摘している。BB p.42

21. sātha, āge, nikaṭa, nāla などは副詞として機能するほかに ke を介したり、介さずに名詞類に接続し、後置詞としても機能する。tinha/tin/ke sātha(231), saba ke āge (510), iṭāe ke nikaṭa (290), tinha/tina/ke nāla (579) pratimā āgai (397), āgarai nikaṭa (552)

22. sahita, nimitta, samāna, uparanta, sameta, hetu は Skt. からの借用語であるが、いずれも ke を介さず名詞類に接続し、後置詞同様の機能を発揮する。mātā sahita (40), jāta nimitta (226), bhagati sameta (235), pūjā hetu (396) なお, samga は mere samga (121) のように用いられている。

23. bīca は ke を介さずにも用いられている。(419) (309)

24. kī を介するものとしては, bhāti 及び tarapha がある。pasu kī bhāti (616), ghara kī tarapha (466)

#### IV

1. MB においても性質形容詞は、(被修飾語の性・数・格に応じて) 語尾変化をするものと語尾変化をしないものとに分けられる。代名形容詞についてはすでに触れたので、ここでは説明を省略する。

2. 語尾変化をする形容詞には、-au, -o 及び -a 語尾のものが含まれている。eka purāno ṭāṭa (305), baranana pāchilau (38), rūkhā bhojana (222); daridratā nai (366)

3. 過去分詞や現在分詞は形容詞的に用いられる。

4. 形容詞は名詞や代名詞にも転用されている。baṛe kī sikha (200), baiṭhe doṁ (517)

5. 数詞のうち基数詞は次の通り。

1. eka, ika, 2. dvai, doi, 3. tina, tīna, tīni, 4. cyāri 5. paṁca, 6. cha, 7. sāta, 8. āṭha, 9. nau, nava, 10. dasa, 12. bāraha, 13. teraha, terai, 14. caudaha, caturdasa, 16. solaha, 18. aṭhāraha/aṭharehai/, 19. unīsa, unāisa, 20. bīsa, 22. bāisa, 24. caubīsa, 26. chabbīsa, 27. sattāisa, 33. taītīsa, 34. cautīsa, 35. paītīsa, 36. chatīsa/chattīsa/, 37. saītīsa/saītīse/, 40. cālīsa, 41. ikatāla, 43. tetāla, 48. aṭhatāla, 50. paṁcāsai, 52. bāvana, bāvanna, 53. trepanē/trepanā/, 54. cauvane, 55. pacāvana, paṁca pacāsa, 56. chappanai 57. satāvane, 59. unasaṭhe, 60. sāṭha, 61. ikasaṭhe, 62. bāsaṭhā, 67. sataṣaṭhā, 70. sattari, 72. bahattarai/bāhattara/, 73. tihattare, 75. pacahattare, picattari, pichattara, 76. chihattare, 77. satahattare, 79. unāsīe, 80. assīe, 84. caurāsīyā, 85. paccāsīe, 87. sattāsīe/sattāsīe/, 91. ikyānavā, 92. bānavā, 93. tirānavē, 96. chānavā, 98. aṭṭhānabai, 100. sai, sata, sau, 110. eka sau dasa, 200. dvai sata, 300. tīni sai, 400. sai cyāri, 675. cha sai picattari, 1613. solaha sai atthānabe

6. 序数詞は次の通り。

1. pahālī (cāla), prathama, 2. dutiya, dūsari (bāra), dūjā (mitra), dujai dina, dūjī, 3. tīsari (pota), tritiya/tritiya/(putra), tījā(puruṣa), tījī, 4. cauthā, 5. paṁcama divasa, 6. chaṭṭhama

chaṭṭhe(dina), 7. sattama, 8. atthama, āthaē/āthavai/(varṣa), 9. navama, 10. dasama /dasamai/

このほかに日付を表わすものとして ekādasī (11日), bārasī (12日), caudasī (14日)がある。

7. 倍数詞としては次の例が見られる。barasa ḍeṛha (1年半), pauna dūnē/dūne/(1.75倍), sau gune (100倍)

8. 全体性を強調する形として次のものがある。duhu (93), tīnau/tīnau/ (107), cārihu/cārau/(252), cahū (243), cāraū/cyārau/(28)

9. 代名詞由来の形容詞のうち性質並びに分量を表わすものとしては、次の例がみられる。aisī bidhi (2), aisī asubha dasā (187), taisī (5), kaisā banaja (531), jaisī mati taisī mati hoi (138), itanī bhūmi (36), eti bastu (284)

## V

1. 不定詞のいわゆる -na 型と -ba 型との2種のうち、AK に現われるのは前者が圧倒的に多い。-ba 型が使用されているのは次の1例 (obl.) のみである。bhali kabita paṛhibe kī kalā (647) 直格形としては ju honā thā so huvā (546) における -nā 及び -na (109, 551) がある。この -nā の用例は、慣用句として KB から借用されたものとしてとらえるべきかとも考えられる。しかし、これまで見てきたように BH 形と KB 形との併用はこの MB の特徴であるから、-nā を特別扱いする必要もなからう。<sup>\*1</sup>

斜格形は1例 (479) が -ne である以外はすべて -na となっている。rovana lāgyau/lāgā rovana/(414), paṛhne lage (479)

2. AK における不定詞の用法としては、斜格化して後置詞 kau, kaū を従えた形が最も多い。すなわち、自らは名詞化し、全体として副詞的に用いられるものである。taba caṭasāla paṛhana kaū gayau (46) なお、kaū も次のように省略されることもある。cale bivāhana bānārasī (105)

次の2例はやはり名詞的に用いられたものであるが、複合名詞のように扱われている点が目立つ。nānī-marana sutā-janama (107), marana-mūla yaha (551)

3. 次のように特定の動詞との間に複合動詞を構成する。dekhana lāgyau nadī (267), paṛhane lage bānārasī (479) duhu kaū lena na dei usāsa (453)

4. 次の例は KB にこれに対応する用法がみられるものである。garbhita bāta kahana kī nāhī (575)

5. 使役動詞の例としては次のものがある。④ kahā ((kahāvai)) (70) ← kaha ((kahai)) (3), ⑤ khavā ((khavābai)) (189) ← khā ((khāhu)) (342), ⑥ dhovā ((dhovabai)) (385) ← dho ((dhoi))

---

\*1 Sūradāsa による -nā 形の使用は全く例外的なものに過ぎぬ。SB. p.308

(388), ④ *suvā* ((*suvāyau*)) (251) ← *so* ((*soyā*))(307)

㉑は基礎動詞の語根に *-āva* を加えて成ったもの, ㉒は語根の長母音が *-vā* に代わったもの, ㉓及び㉔は *-o* 語尾が *-uvā* に代わったもの。

6. AK に現われた複合動詞は次のように分類される。①主動詞の語根と結合したもの, ②主動詞の接続分詞と結合したもの, ③主動詞の現在分詞と結合したもの, ④主動詞の過去分詞と結合したもの, ⑤主動詞の不定詞と結合したもの, ⑥名詞と動詞とが結合したもの。次にそれぞれの用例を示す。

① *calano: le calyau* (109); ② *āno: āe palati* (94), *jāno: mari jāhī* (573); *deno: dāri dai* (267); *parano/parano/: giriparyau* (249); *leno: lūṭi liyau* (43); *sakano: sakyau na āpā rākhi* (249); ③ *calano: hota cali* (318); ④ *rahanō: baiṭhau rahai* (343); ⑤ *deno: jāna nahī dehi* (300); ⑥ *bipada udai bhaī* (110); *je je bātai sumirana bhaī* (658)

7. 普通, 語根に *-i* を加えて接続分詞がつくられている。*boli* (7), *roi* (43) ところが, この *-i* を加えたものにさらに *-kai* を加えることもある。*je paradoṣa chipāikai* (667) *karano* には *-kai* を加えてつくる。*bhojana karakai* (403) *hono* の接続分詞形には次の三通りがある。*hoi* (53), *hvai* (164), *hvai kai* (14)

8. 現在分詞は語根に *-ta* もしくは *-ata* を加えてつくられる。BH 形としては普通, *-te* にはならないが, KB 形と思われる次の 1 例がある。*jyaū tyaū kari dukha dekhate āe pūraba desa* (23) 女性形は *-tī (-ti)* となる。

9. この用法としては次の (()) 内のように KB 同様の意味 (名詞的・形容詞的・副詞的) に用いられるが, 副詞的な用法が最も多い。*ghaṭati hota cali* ((*ghaṭatī*)) (318), *phiratī chāha* ((*phirtī huī chāh*)) (44), *dekhata cakita hoi saba koi* ((*dekhne par*)) (560), *bānārasī sunata biratanta* ((*sunte hī*)) (496), *phirata phirata* ((*phirte phirte*)) (294)

また, これは次のように複合動詞・受動態・無人称態の主動詞としても用いられる。*kahata na banai* (138), *kahī na jāī sāhibī* (560)

これが直説法現在時制や敍想法諸時制に用いられたことは, 当時の他の資料によって明らかであるが, AK には用例が見当たらない。

10. 過去分詞は語根に次の語尾を加えてつくられている。男性単数形: *-yau, -yā, -ā, -o*; 男性複数形: *-e, -ye, -ai*; 女性単数形: *-ī*; 女性複数形: *ī*。このうち *m. sg.* の *-yā, -a* 形は明らかに KB のものと思われる。*m. sg.* の中では *-yau* 形が他よりはるかに多い。

自動詞は主語の性・数に一致して活用される。*bolā* (417), *āyau* (474), *samujhe* (80), *bīte* (45), *nikasī* (96), *baṛhī* (217), *bhaī* (658)

他動詞は目的語の性・数に一致して活用される。*pāyau kula s'rimāla* (10), *ḍerā judā liyā* (313), *tinake bacana sune* (37), *pahirī mālā mantra kī* (10), *bāta kahī* (43),

11. 次の諸動詞の過去分詞は上記の規則に従わない。① *hono*; *huvā, huō, hūē/huve/, hūī/*

huī/. 以上は「なった」の意味に用いられたものであるが、同義に次のものも用いられている。  
bhayau (17), bhayā (331), bhae (9), bhai (11), bhai (658)。「あった」の意には次の形が用いられている。これはまた、後述のように助動詞としても使用されている。<sup>\*1</sup> hutau (471), hute (473), he (470), hutī (71)。なお、これと同義に KB 形の thā も用いられており、助動詞としても使用されている。<sup>\*1</sup>

ju honā thā (546), hama āe/āye/the (528) ② karano: kīnāū/kīnau/(56), kīnyau (2), kiyau /kiyo/(18), kīe/kīnā/(50), karī (263)

③ deno: dinaū/dīnau/(79), diyau/diyo/(58), dīnai/dīne/(56), die (55), dīnī (287), dai (53), dī (418)。

④ leno: līnāū/līnau/(59), liya/liyā/(411), liyau (442), liyo (43), line (102)

⑤ jāno: gayau (46), gae (223)

⑥ marano: muā/muvā/(63), mue/muvo/(42), muī (205), marī (106)

12. 過去分詞は単独で直説法過去時制形として、単なる過去の動作・状態を示すのに用いられているほか、助動詞を伴って直説法（並びに敍想法<sup>\*2</sup>）の種々な時制に用いられている。また、次のようにも用いられている。①名詞として: kahā hamārā saba bhayā/huā/(331), binā kahe (609), ② 副詞句に: līne nāpita sātha (102), cale cale āe tisa thāū (370), ③ 複合動詞に jaba laū saba baiṭhe rahe (345), ④ 形容詞として: khulau javāhara (320), bhīje bastranha/bastrau/(301)

13. MB には能動態・受動態・無人称態の三つが認められる。

14. 受動態は次のように構成されている。

①他動詞である主動詞の接続分詞に -yai, ないしは, -jai を加えてつくるもの。anna na pāiyai (104)。ただし, deno などは語基が不規則な方法でつくられている。dijai (91), kījai (305)

なお、この形は受動態からていねいな依頼・命令を表わすのに用いられるようになっている。gunahagāra kījai usahi (542), など。

②主動詞の過去分詞（性・数に応じた変化あり）に jāno の活用形を加えてつくられている。gupata bāta so kahī na jāi (459), te kāhū pai kabī na jāhī (659)

15. 無人称態には次の 1 例が見られるのみであるが、主動詞（自動詞）の過去分詞に jāno の活用形を加えてつくられている。mrisāvāda binu rahā/rahyā/na jāi (656)

16. 命令法の 2 人称単数形は語根に -u を加えてつくられている。putrī sunu (42), putrī soca na karu (44), tū calu (400)

---

\*1 V- 22, 24 参照。

\*2 AK には現われていない。

語根が長母音でおわるものにあっては -u のかわりに -hi を加えてつくることがある。dehi juvāba (496), tū nicīta mana hohi (529)

17. 命令法 2 人称複数形は語根に -au, もしくは, -o を加えてつくられたものと, -hu を加えてつくられたものがある。lajjā baho (377), karau bihāra/vyauhāra/(381), calo (535), calahu (121), becahu bastu (286), roṭi dehu (287)

18. AK に用いられている直説法現在時制形としては、動詞語根に活用語尾を加えてつくるものしか用いられない。これは敘想法不定未来時制形と同一である。“Sūrasāgara” には、主動詞の現在分詞に助動詞 hono の現在形を加えてつくられた、もう一つの直説法現在時制形がかなり用いられている。しかし、この形は AK には全く用いられていない。

19. 直説法現在時制の活用語尾は次の通り。

① 1 人称 sg. -aū, -ū, pl. -hī, -āi

② 2 人称 sg. -ahi, pl. -au

③ 3 人称 sg. -ai, -y, -i, pl. -hī

① sg. maī karaū (519), deū (380), pl. hama jāhī (299)

② sg. tū jāhī (518), tuma basau (299)

③ sg. basai (24), hoi (43), dei (326), pl. karahī (68)。

20. この時制は本来の用法のほかに、次のようにも使用されている。①直説法未来時制の意に用いられる。kahaū āpanī kathā vikhyāta (4), garbhita bāta kahaū hiya kholi (7) ②過去時制の意に、AK においてはこの用法が非常に多い。kharagasena …karai javāhara kau bepāra (145) ③敘想法不定未来時制の意に。これについては先述したように、両者は同形である。歴史的に見ると、この形は次第に敘想法不定未来形に用いられることが多くなった。doū bipra karai apaghāta (554), parai kāla-mukha kauna (114)

21. 直説法未来時制の実例は僅少であるので、次のように 3 人称についてのみ記述することができる。

単数形 [( ) 内は女性形——推定によるものも含む] は語根に -egā ((-egī)), -ahigā ((-ahigī)), もしくは, -igā ((-igī)) を加えてつくられる。āvegā/āvaigā/(593), āvaigī (523), calahigā (481), māgahigā (481), hoigī (6, 673)

複数形は語根に -aige, -ahige を加えてつくられている。samujhaige (673), hāsahige (674)

22. 以上の例に限っていえることは、いわゆる BH. 及び Br. には -ga, -ha- 両型の未来時制形が認められるのに対して、AK には前者のみが見られるということである。

23. 直説法過去完了時制形の例も非常に少ない。これは主動詞の過去分詞に既述の助動詞 hutau や thā を加えてつくられている。一定時以前に完結した動作・状態について述べるものである。gae hute māgana kau pūta (79), hama to prathama kahī hutī (330) 特殊な形として gayau thau (454) がある。

24. 直説法現在完了時制形は主動詞の過去分詞に助動詞現在形 (hai, など) を加えてつくられる。この用例もわずかしは見当らない。bakhānī hai (2), banyau /banyo/hai (160)

25. 直説法過去未完了時制形は主動詞の現在分詞に助動詞の過去形を加えてつくられている。ただし、用例は次の1例のみ。āvata he (470)\*<sup>1</sup>

26. 敍想法の用例は既述(17)のもの以外見られない。“Sūrasāgara”においても、その他の敍想法の用例がわずかであるとの指摘がなされている。\*<sup>2</sup>

## VI

1. 副詞の用例には次のものがある。

### ① 時に関するもの

aba (158), taba (2), jaba (16), jaba … taba … (263), kabhahū (146), prāta (390), nisi (380), āja (542), kāli (347), khl̥na (416), tatakāla (61), nita (390), phiri (80), bahuraū (445), turita (273), acānaka (63), turam̐ta (63), āgai/āge/(341)

### ② 場所・方角・位置に関するもの

ihā (381), ihā uhā (236), uhā (382), tahā (420), jahā (420), jahā tahā (572), kahā (11), kahū (216), kahū (454), jita titta (226), jita kitta (485), āgai/āgai/(233), nikaṭa (8), sanamukha (156), pāsa (419), cahū disi (243), cahū ora/vora/(318), nāla (109)\*<sup>3</sup>

### ③ 態様に関するもの

yaū (529), yaū hī (255), jyaū (43), jyaū tyaū kari (79), jyaū … tyaū … (24), ema (37), kema (42), jema (37), jathā (6), tathā (209), jaisā … taisā … (306), manahu (548), janu (369), kaisē (267), akele (62), sātha (475), nyāre-nyāre (569)

### ④ 程度に関するもの

bahuta (16), bahu (17), kichu/kachu/(61), jora (592), adhika (41)

### ⑤ 禁止・否定に関するもの

nāhi (78), nahī (243), na (104), jina (351), jini (341)

2. 次の tau, bhī 及び hī は日本語の副助詞のように用いられている。

so tau mithyāmata bānī hai (2), so bhī (621), usa hī roja (543)

3. 接続詞としては次のものが用いられている。aura (18), aru (31), pai (179), taū (80), kai (159), kai to … kai to (303), tau (92), jo (380), tātai (461)

## VII

AK に見られるペルシア語（アラビア語）からの借用語

---

\*1 MP は he ではなく、rahe と読んでいる。

\*2 SB p.316

\*3 これは KB の sāth と同義に用いられている。

〔 〕内は文中の当該語とのつながりを示す。先頭に現われた語が AK に用いられたものである。配列はデーヴァナーガリー文字のそれにならった。

amala [karai], 'amal, ar. n. 従事(56)

aradāsa [kinī], 'arzdāsht, per. n. 嘆願(159)

avāja [bhai], āwāz, per. n. (命令の)声(150)

asabāba [thaili kau], asbāb, ar. n. 物品(360)

ahamaka [kotawāla], ahmaq, ar. adj. 大馬鹿の(522)

ādamī [cāgā—], ar. per, n. 人(563)

āna, ān, per, n. 威光(35)

āni, ān, per, n. 勝利宣言(27)\*<sup>1</sup>

āsikhabāja [bhayau], 'āsiqbāz, per, adj. 恋愛遊戯をする(170)

āsikhi [kari], 'ās'iqī, ar. n. 恋愛遊戯, 火遊び(181)

ijār [ke nāre], izār, per. n. パイジャーマー(319)

ilāja [karahi], 'ilāj, ar. n. 工夫, 努力(487)

kajī [lakhī], kajī, per. n. 不正, 欠陥(263)

karaja [kacaurī], qarz, ar. n. 借り, 借金(339)

kāgada, kāgaṣ, ar. n. 紙(214), 書簡(477), 書類・書きもの(558)

kārakuna, kār kun, per. n. カールクン(ムガル時代の徴税制度の末端で徴税の任にあった)(56)

kutabā [parhyau], kḥutaba, ar. n. 即位宣言(27)

kuriṣa/kuriṣā/ [kī cīrī], kuriz, per. n. 羽毛の抜けかわり(194)\*<sup>2</sup>

kulāla, kulāl, per. n. 陶工(29)

kaula [kiyau] qaul, ar. n. 誓約(501)

khajānā, khazāna, per. n. 金庫, 国庫(156)

khatā, kḥatā, ar. n. 科(とが), 失策(538)

khabari, kḥabar, ar. n. 知らせ(300, 470)

kharacī [dai], kḥarc, n. 路銀(53)

kharacyau [daraba], kḥarc が動詞化したもの, 「費した」(77)

kharida [karahu], kḥarīd, per. n. 仕入れ(384)

khālasai [kīnau], khāliṣa, ar. adj. 「御料及び御料地」が原義であるが, ここでは「没収された」(22)

khāli [hvai], kḥālī, ar. adj. 一文なしの(366)

khusahāla [hvai, rahe], kḥus' hāl, per. adj. 機嫌のよい(484), 楽しい(547)

---

\*1 語尾の -i は押韻のため

\*2 NP は鳥の名をあげている。

khusī [bhae], *khus'*, per.adj. 嬉しい(368)\*<sup>1</sup>  
 garība, *garība*, ar. adj. あわれな, みじめな(172)  
 gasta [karahī], *gašt*, per. n. 巡回, 歩きまわること(355)  
 gujāran, *guṣar*, per. が動詞化したもの, 「供する」(510)\*<sup>2</sup>  
 gunahagāra/gunahigāra/, *gunāhgar*, per. n. 罪人(542)  
 gunāhu [bhayā], *gunāh*, per. n. 科, 罪, 失策(537)\*<sup>3</sup>  
 gairasāla, *gairsāla*, ar. adj. 「不正な, 瑕のある」から, にせの ((金))(506)\*<sup>4</sup>  
 jawāhara [khulau-], *jawāhir* ar. n. 宝石類(320)  
 jahamati [pare], *zaḥmat*, ar. n. 患い(205, 240, 480)  
 jāgīra, *jāgīr*, per. n. 賜与地(15)  
 jiraha, *zirih*, *zirah*, n. 鎖かたびら(155)  
 jīna, *zīn*, per. n. 鞍(155)  
 juāba [diyau] *jawāb*, ar. n. 返答(360)  
 judā, *judā*, per. adj. 別の(313)  
 judāī, *judāī*, per. n. 別離(406)  
 jamāti [jurī], *jamā* 'at, ar. n. 一団(500)\*<sup>5</sup>  
 juwāba, *juāba* と同じ。(496)  
 jora [binā], *zor*, per. n. 力, 圧力(545), adv. しきりに, 熱心に(592)  
 jorāwara, *zorāwar*, per. adj. 屈強な(302)  
 takhata [baiṭhī-], *takht*, per. n. 玉座, 王位(27)  
 tamāī/tamāy/ [kāhū kī-], ar. n. 誘惑, 誘引(135)  
 tarapha [ghara kī-], *ṭaraf*, ar. n. 方角(466)  
 tahakīka [binā-], *taḥqīq*, ar. n. 取調べ(300)  
 tahasīlahi, *tahsīl*, ar. 「徴収」が動詞化したもの?(56)  
 tāita [-eka garhāyau], *ta'wiz*, ar. n. お守り?(369)  
 darajī, *darzī*, per. n. 仕立屋(29)  
 daradabanda, *dardmand*, per. adj. 情深い(171)  
 daravāje, *darwāza*, per. n. ob. 戸(153)

---

\*<sup>1</sup> 音韻的には *khus'i* per. n. に近いが, [bhae] とあるので, やはり adj. にとるべきであろう。

\*<sup>2</sup> MP は *gudārau* と読む。

\*<sup>3</sup> 語尾の -u は押韻のため。(538)では *gunāha*

\*<sup>4</sup> NP は *gair*+*takasāl* に語原を求めている。

\*<sup>5</sup> MP は *kosrā* と読む。

dāma, dām, per. n. 金 ((かね)), ダーム, (373, など)\*<sup>1</sup>  
 duvā [kīnī], du'ā, n. 嘆願・言上(546)  
 darabesa, darbeš', per. n. ダルヴェーシ? (199)\*<sup>2</sup>  
 dināra, dinār, per. n. デイナーナル金貨(216)  
 dibāna, dīwān, per. ディーワーン(515)\*<sup>3</sup>  
 nakhasa, nakhhās ar. n. 市場(314)\*<sup>4</sup>  
 nagadi, naqdi, ar. n. 現金  
 najari [qujārau], nazar, ar. n. 一見(510)  
 naphara, nafar, ar. n. 使用人, 人夫(498)  
 naphā, naf', nafā, ar. n. 利益(315)  
 narama-garama, narm-garm, per. n. なだめとおどし(165)  
 nawāba, nawāb, nawwāb, ar. n. ナワーズ(127)  
 nauwāba(110) 同上  
 paragane [bāvana-], pargana, per. n. パルガナ ((郡))(31)  
 pāika, pāyak, per. n. 使用人, 手下(62)  
 pātisāhi/pātisyāha/, pādśāh, per. n. 皇帝(149)  
 pula, pul, per. n. 橋(153)  
 pesakasī [bhejai], peś kaś per. n. つけとどけ(172)  
 pajārahu [kā khela], paizār, per. n. つっかけ(601)  
 potadāra, fotahdār, per. n. フォートダール ((ムガル時代の徴税制度の役職の一))(56)  
 pyāde [bhae], piyāda, per. adj. 徒歩の  
 phakīra, faqīr, ar. n. ファキール? (171)\*<sup>5</sup>  
 pharajanda, farzand, per. n. 息子(344)  
 pharakhatī, fārig-khatī, ar. n. 弁済証書(51, 566, 568)\*<sup>6</sup>  
 phārika [bhae], fārig, ar. adj. 解放された, 心配のない(403)  
 phikira/phikara/ [karohu], fikr, ar. n. 思案(525)  
 phuramāna/pharamāna/, farmān, per. n. 勅命(152)

\*<sup>1</sup> 本来, 40分の1ルピー＝ムドラー。ダームはアクバルが発行した銅貨でパイサーとも呼ばれ, 323.5グレンに相当した。ここでは今日のパイサー同様, 貨幣単位並びに金の意の両方に使用されている。

\*<sup>2</sup> MP は durabesa と読む。いずれにしても疑問は残る。

\*<sup>3</sup> ここでは Faujdār の補佐?

\*<sup>4</sup> 本来は, 奴隸市, 家畜市の意。

\*<sup>5</sup> この1行の意味は明確でない。

\*<sup>6</sup> (566)では——likhau となっているが, 誤植と思われる。MP にはこの部分は欠けている。

bandūka, bandūq, ar. n. 鉄砲(155)  
 bakasāi [gunaha-], baḥs'. per. から「赦す」へ動詞化。(165)  
 bakasīsa [dehu], baḥs'is', per. n. 賞与, 心づけ(300)  
 bajāra, bāzār, per, n. バーザール(198)  
 bākī, bāqī, ar. n. 残余(361)  
 bāra, bār, per. n. 回数, 度数(618)  
 bidā [bhae], vidā', ar. ((複合動詞)) 辞去[する](346)  
 bugacā, bugca, per. n. 小さな包み(324)  
 behayā, be-hayā, per-ar. 無恥の, なさけない(331)  
 behāla, be-hāl, per-ar. とり乱した, どうてんした(250)  
 makara [cādnī], makr, ar. 欺瞞, まやかし(412)  
 majūra, mazdūr, per. n. 苦力, 労務者(140)  
 masakcati [gaī akātha], mos'aqqat, ar. n. 労苦, 勤勉(364)  
 māpha [karai], mu'af, ar. n. 赦免(507)  
 mīra, mīr, ar. 'amīr の略, ここでは「将軍」の意(449)  
 mukāma [kiyau], muqām, ar. n. 逗留(241)  
 mugala, mugal, T. 「役人」の意(21, 517, など)  
 mulaka, mulk, ar. 国(259)  
 musakila [bhai], mus'kil, ar. n. 厄介なこと(158)  
 muhara, muhr, per. n. 印, 封印(22)  
 yādi [āi], yād, per. 複合動詞, 思い出(す)(528)  
 yāra, yār, per. n. 友人(464)  
 radī, raddī, per. n. 廃物, ほご(267)  
 raphika, rafiḡ, ar. n. 仲間, 友(310)\*1  
 rāha [kula kī-], rāh, per. n. 道, 進路(271)  
 reja, rez, per. n. こまごました品(324)\*2  
 roja, roz, per. n. 日(543)  
 rojagāra, rozgār, per. n. 生業(134), 仕事(180)  
 rojanāmā, roznāma, per. 出納簿(356, 490)  
 lāla, la'l, ar. n. ルビー(39)

---

\*1 もっとも、この意味は明確ではない。

\*2 reja-pareji/paroja/ とあるが、pareji/paroja/の意味は不明確。もっとも、pa- をそう入しての reja の反復とも考えられる。

vakīla, vakīl, ar. n. 名代, 使節(164)  
 sangatarāsa, sangtarās', per. n. 石工(29)  
 sajāi [dei], sazā, per. n. 刑罰(469)  
 sarāi, sarā per. n. サラーイ ((はたご))(503)  
 sabāra/savāra/, sawār, per. n. 乗馬者(448)  
 sarahadd/sarahada/, sarhad, per. n. 境界(36)  
 sarāpha, sarrāf, ar. n. 両替商人, 貴金属商人(505)  
 sarāphī, sarrāfī, ar. n. 両替商, 貴金属商(47)  
 sāla [caturdasa-], sāl, ar. n. 年((歳の意に))(168)  
 sāhi/syāha/, s'āh, per. n. 皇帝(15)  
 sāhiba, sāhib, ar. n. 主(237), 夫への呼びかけ(376)  
 sāhibī, sāhibī, ar. n. 豪勢さ(560)  
 sikaligara, saigalgar, ar-per. n. 研(とぎ)屋(29)  
 sitāba/s'itāba/, s'itāb, per. adv. 急ぎ, 即刻(496)  
 sirapāu [diyau], sar-o-pā, per. n. サローパー((下賜される衣服))(448)  
 sisagara, s'is'gar, per. n. ガラス細工師(29)  
 sultatāna, sultān, ar. n. サルタン, 皇帝(58)  
 sukhuna/supana/, sukhun, sukhun, per. n. 話, 会話(568)  
 sora, s'or, per. n. 騒ぎ(252)  
 saudā, saudā, ar. n. 商い(208)  
 syābāsa, s'ābās', per. interj. 賞讃・激励の意に(534)  
 haka-nākaka, haq-nāhaq, ar-per. adv. 是が非でも(468); n. 正邪(473)  
 hadd, hadd, ar. n. 境界, 国境(35)  
 hamāla, hammāl, ar. n. 運搬人(62)  
 hawāigara, hawāigar, ar-per. n. 花火師(29)  
 hākīm, hākīm, ar. n. 支配者, 主長(150), Faujdār(515)  
 hukama [diyau], hukm, ar. n. 勅命(58)  
 husiyāra [rahu], hos'yār, per. adj. 注意深い, 警戒した(481)  
 heca, hec, per. adj. 無意味な, つまらぬ(594)